

説教 「神の子の誕生」

(ミカ書 5 章 1-3 節 ルカ 2 章 1-20 節)

2022 年 12 月 25 日

クリスマス主日礼拝

日本基督教団仙川教会

大串肇牧師

クリスマスと言えば、ユダヤの町ベツレヘム、馬小屋、飼い葉桶の中に寝かされている乳飲み子、羊飼い、天使たち等々。クリスマスはメルヘンの世界、現実離れしたワンダーランドです。他方、この不思議な世界におよそ 2000 年もの間、世界中の人々は魅せられ続けています。一体何故なのでしょう。

神の子が誕生したという天使の知らせが、おとぎ話でもなく、フェイクニュースでなければ、実に衝撃的な大事件です。一体何のために神の子はこの地上で誕生しなければならなかったのでしょうか。2000 年前の出来事ですから、このミステリアスな出来事を現代において実証したり、その真相を歴史的に明らかにしたりすることは簡単なことではありません。というか、不可能です。

そこで、この物語の中で(天使や神の子イエスを除いて)主要な役割を果たしている人物たちに注目したいのです。まずは羊飼いたちです。とはいえ、なぜ天使が現れたのが羊飼いたちなのか、また、彼らも無名の人々です。そこで神の子の誕生という不思議な出来事に直面した彼らがどのような態度をとったのか、その物語の結びに留意していただくと、「神をあがめ、賛美しながら帰って行った」というくだりでイエスの誕生物語は結ばれています。イエスが神の子であるからこそ、少なくともそういう信仰があったからこそ、彼らは神をあがめ、賛美した、と言えるでしょう。そこでルカ福音書がわたしたちに訴えたいことは、イエスの誕生を通して神を賛美し、礼拝する共同体が生まれたという事実であると言っても過言ではないでしょう。

そしてもう一人の主要な人物はマリアです。彼女には既に天使ガブリエルが現れ、彼女が神の御子を身ごもり、イエスと名付けることを告げられていました。

「お言葉通り、この身になりますように」とマリアは答えました(1 章 38 節参照)。また、マリアは「これらの出来事をすべて心に収め、思いめぐらした」とあります(19 節)。こうしてマリアはイエスの出来事を通して思いめぐらし、神を知ったのです。「思いめぐらす」とはルカ福音書では特異な言葉です。知的な意味ではなく、まさに「心の中に収めること」を意味します。知性だけではなく、

経験や体験を通して受け入れることを意味します。こうして御子イエスの誕生を通して神を知り、神をあがめ、賛美する。そういう信仰をもった人々の群れが生まれたことを子の誕生物語は証言しているのです。こうして誕生物語はイエスの十字架と死とともに、復活と昇天の後に生まれるキリスト教会の誕生と反響しているのです。

まさにイエスの誕生とは旧約聖書から見ればゴールでもありますが、救済の歴史のスタートなのです。ですから、天使は「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである」と語りました。

「今日」とは聖書の時代では過去ですが、語られているわたしたちには「今日」なのです。あなたのために救い主が生まれた。そのことを通してあなたが今神を知り、神をあがめ、神を賛美するためなのです。なぜなのでしょう。それは、神はそれほどまでにあなたのことを愛してくださっているからです。

神に等しいお方がわたしたちと同じ姿になり、苦しみも悲しみも共に担われる。そうしてわたしたちを罪と滅びから贖い出してくださるためだったのです。

テトスの手紙 3 章 4 - 5 節はこう述べています。「しかし、わたしたちの救い主なる神の慈しみと人間に対する愛とが現れたときに、神は、わたしたちが行なった義の業によってではなく、御自分の憐れみによって私たちを救ってくださいました」。神の愛と慈しみが御子イエスのご誕生を通して明らかにされた。これがまさに神の栄光なのです。

「いと高きところには栄光、神にあれ、

地には平和、御心に適う人にあれ」（ルカ 2 : 14）

天使の大合唱は、「マリアの賛歌」（magnificat）、「ザカリアの賛歌」（Benedictus）と並んで第三の賛歌（gloria）です。天と地、神と人との調和、一致、和解、平和を称えている有名なクリスマスの賛美歌です。

ところが、この天使の賛美歌で何が讃えられているのか。そこで問題なのは最後の一句なのです。新共同訳聖書は〈み心にかなう人々〉と訳しています。邦訳聖書はほとんどすべてそう訳しています。これは意識です。原語である（ギリシア語）新約聖書のでは〈善良な意思の人々〉あるいは〈慈悲深い人々〉

（avnqrw,poij euvdoki,aj）としか書いていません。神のみ心にかなうなどとは原文では書かれていません。もし原文に忠実にしたがえば、地上の平和は「善良な意思」、つまり良心に基づいて生きている「善人」にだけに限定されているということです。もしそうならば、平和も救いも人間の資質の問題であり、努力や心がけしだいということになります。もし本当にそうならば、果たしてこの地上に平和や救いは可能なのでしょうか。単なる理想なのでしょうか。

最近、死海のほとりで発見された古い写本DSS（死海写本）の研究からわかったことがあります。問題となっている14節の最後の句に書かれた「善良な意思の人々」あるいは「慈悲深い人々」は、神の慈悲や神の力に関連して言及されていることが明らかにされました。つまり地上の平和がもたらさせるのは善良な人々ではなく、神の恵みを受ける人々のことなのです。ですから、「神には栄光。神が恵む(あるいは「慈悲」を授け、あるいは「助ける」)人々に救い(があるように)」となるのです。

実際に最近の英語訳（NRSV）、ドイツ語訳（EIN）はこの読み方を採り入れています。人間の慈悲深さや善行が讃えられているのではなく、徹頭徹尾慈悲、神の栄光すなわち神のご慈悲、御恵みが讃えられているのです。この場合、シャロームは政治的な意味で平和というよりも、究極の救いという意味でしょう。こうしてこの賛美歌を「神には栄光があるように。神が恵む人々には救いがあるように」と訳すことが出来るのではないのでしょうか。

神はご自身があわれもうとされる人々を愛されるお方なのです。それは圧倒的な神の自由です。人間がうみだした差別や偏見をどんでん返しにしてしまうのです。王様や大祭司、大金持ちなどの権力者、特権階級のような人々ではなく、一見すると、価値がないと他人から判断され、見下されているような人々の側に神は立たれたのです。これぞ大いなる神の恵み、野宿していた寄る辺なき羊飼いたちだけがクリスマスの馬小屋に招かれている理由ではないでしょうか。これが、クリスマスのメッセージです。

「神は、その独り子をお与えになったほど、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」(ヨハネ 3:16)

神は圧倒的な自由によってわたしたちを選び、わたしたちを召してくださる。この神のみ恵みの中でこそ、ほんとうの救いがある。究極の救いがあるのです。御子イエスこそ、その神の愛の徴です。その大いなる喜びを心から感謝し、多くの人々と分かち合いたい。誰もが今、福音を心から受け止め、神を賛美し、神をあがめることへ招かれている。この福音をわたしたちは証してまいりたいと願います。お祈り致しましょう。